目次

まえがき

第１章　総説 …… 8

第１節　文字の機能と特性 …… 8
1　言語における文字 …… 8
2　文字の成立 …… 9
3　音声言語と文字言語 …… 10
4　文字言語の特性 …… 11
5　文字の定義 …… 12
第２節　文字の分類とその歴史 …… 14
1　文字の分類 …… 14
2　文字の誕生と古代の文字 …… 15
3　子音文字の派生 …… 16
4　アルファベットの成立 …… 17
5　表音文字と音韻の関係 …… 17
6　文字と語の関係 …… 18
第３節　日本のおける文字 …… 20
1　日本語の文字体系 …… 20
2　正書法と表記法 …… 20
3　日本語の表記法 …… 21

第２章　漢字 …… 22

第１節　漢字の起源と展開 …… 22
1　漢字の起源 …… 22
2　漢字文化圏の形成 …… 23
3　漢字文化圏の多様化 …… 25
第２節　書体 …… 27
1　書体の変遷 …… 27
2　印刷の書体 …… 28
3　書体の表現効果 …… 29
第３節　字体 …… 31
1　字体とは …… 31
2　字体のゆれ …… 32
3　字体についての政策 …… 33
4　地域などによる字体の差 …… 34
第４節　漢字の構成 …… 35
1　漢字の構成方法 …… 35
2　漢字の構成要素 …… 37
3　部首 …… 38
第５節　漢字音 …… 39
1　中国語の音節構造 …… 39
2　中国漢字音の変遷 …… 40
3　日本漢字音 …… 40
4　日本漢字音の系統 …… 42
第６節　訓 …… 47
1　訓とは …… 47
2　音と訓との関係 …… 49
3　熟字訓 …… 50
4　訓読みに関する問題点 …… 51
第７節　国字と国訓 …… 52
1　国訓 …… 52
2　国字 …… 53
第８節　当て字 …… 57
1　当て字とは何か …… 57
2　当て字の分類 …… 58
3　当て字と意識 …… 60

4　当て字の現在と未来 …… 61

第3章　仮名 …… 62

第1節　万葉仮名 …… 62
1　万葉仮名の種類 …… 64
2　『万葉集』の表記 …… 64
第2節　平仮名 …… 68
1　平仮名の成立 …… 69
2　平仮名の資料とその字体 …… 70
第3節　片仮名 …… 75
1　片仮名の成立 …… 76
2　片仮名の資料 …… 77
3　片仮名の字源 …… 78
4　片仮名の用途 …… 82

第4章　ローマ字 …… 84

第1節　明治初年までのローマ字 …… 84
1　ローマ字とは …… 84
2　室町時代のローマ字 …… 85
3　江戸時代のローマ字 …… 86
4　幕末以降のローマ字 …… 87
5　一般社会への広がり …… 87
第2節　ローマ字の綴り方 …… 88
1　明治以降のローマ字 …… 88
2　ローマ字を国字に …… 88
3　ヘボン式 …… 89
4　日本式 …… 90
5　両者の対立と並立 …… 91
6　現行のローマ字の綴り方 …… 92

第5章　補助符号 …… 94

第1節　訓点の方法 …… 94
1　訓点と訓点資料 …… 94
2　訓点の歴史 …… 94
第2節　濁点 …… 100
第3節　半濁点 …… 103
第4節　踊り字 …… 105
第5節　句読点 …… 107
第6節　さまざまな符号・記号 …… 109
1　符号・記号 …… 109
2　引用符 …… 110
3　長音符 …… 111
4　見せ消ち …… 111
5　合字ほか …… 112
6　ピクトグラム …… 112

第6章　表記法 …… 114

第1節　仮名遣い …… 114
1　仮名遣いとは …… 114
2　現代仮名遣い …… 115
3　現代仮名遣い成立までの経緯 …… 117
第2節　送り仮名・振り仮名 …… 120

1　送り仮名・振り仮名 120
2　送り仮名・振り仮名成立の背景 121
3　現代の送り仮名・振り仮名 123
第３節　外来語の書き方 125
1　外来語とは 125
2　漢字による表記 125
3　片仮名による表記 126
4　外来語の表記のきまり 126
5　日本語で表記する際の問題 127
6　外国人学習者の不便 128
第４節　漢字政策 129
1　戦前までの漢字政策の歴史 129
2　戦後の漢字政策 129
3　周辺に位置する漢字政策 131
4　戦後の漢字政策の内容 133

第７章　文字と社会 136

第１節　印刷の歴史 136
1　印刷とは 136
2　信仰の場における印刷 136
3　信仰から学問へ 137
4　キリシタン版 138
5　古活字版 138
6　製版による印刷の大衆化 139
第２節　印刷の文字〜明治以降（近代） 140
1　明治時代 140
2　大正・昭和（戦前まで） 141
3　戦後 142
4　印刷がもたらしたもの 144
第３節　日本の書道 145
1　書道とは 145
2　日本における書道 145
3　芸術としての書道 146
4　流派書道 147
5　実用の書道 147
6　文化と書道の広がり 147
7　明治以降の書道 148
第４節　文字遊び 149
1　文字遊びとは 149
2　仮名を利用したもの 149
3　漢字を利用したもの 150
4　絵を利用したもの 151

主要参考文献 152

事項・人名・書名索引 154

執筆担当者一覧 159

第2節　文字の分類とその歴史

1　文字の分類

世界の文字を分類すると、大きく表語文字と表音文字に分けられる。

- 表語文字
- 表音文字
  - 音節文字
  - 単音文字

表語文字は表意文字とも呼ばれてきたが、その一つである漢字を例にすると、「一」「山」はそれぞれ意味（「一」は〈数の、ひとつ〉、「山」は〈地形の、やま〉）を表すが、同時に音（「一」はイチ、「山」はサン）をも表している。すなわち、全体としては言語単位の上では語を表すものであることから、「表語文字」と名付けるのが適切である。

これに対して、表音文字は語の音だけを表すものをさし、それには音節を直接表すものと単音（音素）だけを表すものがある。日本語の平仮名・片仮名は前者の代表的なものであり、ローマ字や英語などのアルファベットは後者に相当する。ただし、アルファベットの場合、語の単位で分かち書きされるのが一般的である。また、ハングルのように、単音文字であるが、音節相当で一定のまとまった形を構成するものも見られる（図1-4）。

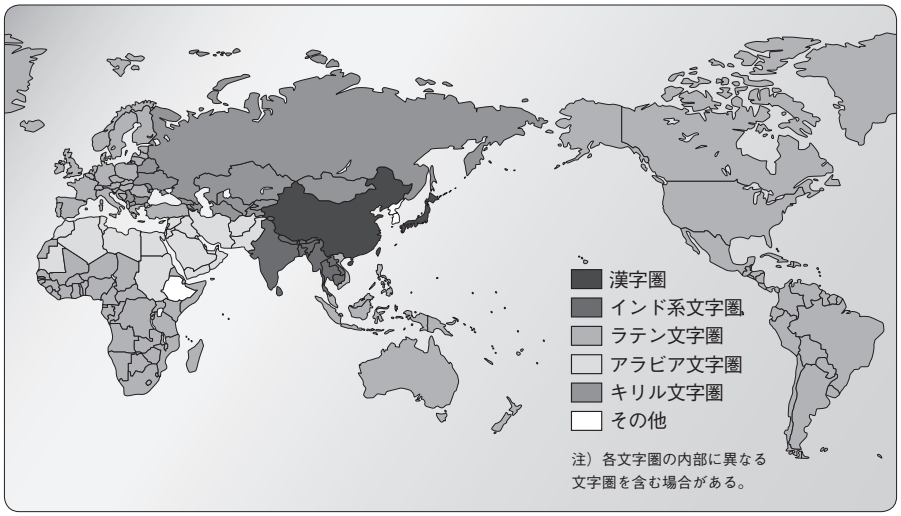
2　文字の誕生と古代の文字

現在確認されている最古の文字は紀元前3500年頃にメソポタミアで用いられた楔形文字（シュメール文字）であるが、これは、エジプトのヒエログリフ、インダス文明の原インダス文字、中国の漢字（甲骨文字）や、マヤ文明のマヤ文字などとともに表語文字である。このことから、文字は表語文字を起源としていると認められる。

ただ、その楔形文字もすでに最古の資料において、表語文字の用法以外にも、音節を表す表音用法（漢字で言う仮借（かしゃ））の用法が見られる。これは、ある語を表す文字をその語と同じ、または類似の音をもつ別の語にも用いる、いわゆる「当て字」の用法である。このように、表語文字が古くから音節、または音節の一部を表すという表音的用法をも兼ね備えていたことは注目される（図1-5）。

その際、楔形文字やヒエログリフなどでは、音形を借りると同時に、意味範疇を示す弁別的要素として限定符（Determinatives）を用いて記された。これは、漢字における、音を表す声符と、意味範疇を表す義符とからなる形声という構成原理と相通じる手法によるものである。

図1-4　世界の主要文字圏概略図

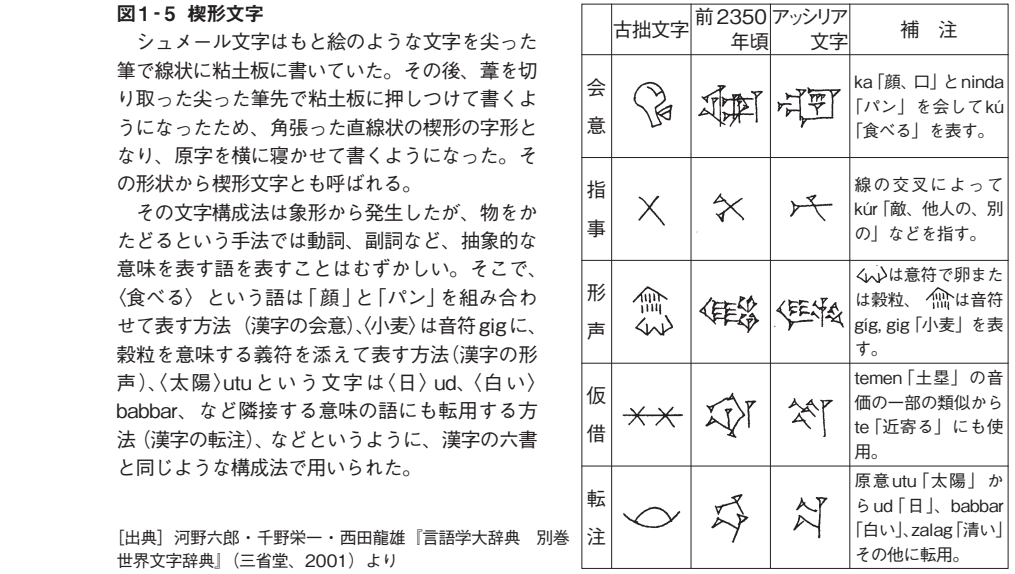


［出典］河野六郎・千野栄一・西田龍雄『言語学大辞典　別巻　世界文字辞典』（三省堂、2001）より

図1-5　楔形文字

シュメール文字はもと絵のような文字を尖った筆で線状に粘土板に書いていた。その後、葦を切り取った尖った筆先で粘土板に押しつけて書くようになったため、角張った直線状の楔形の字形となり、原字を横に寝かせて書くようになった。その形状から楔形文字とも呼ばれる。

その文字構成法は象形から発生したが、物をかたどるという手法では動詞、副詞など、抽象的な意味を表す語を表すことはむずかしい。そこで、〈食べる〉という語は「顔」と「パン」を組み合わせて表す方法（漢字の会意）、〈小麦〉は音符gigに、穀粒を意味する義符を添えて表す方法（漢字の形声）、〈太陽〉utuという文字は〈日〉ud、〈白い〉babbar、など隣接する意味の語にも転用する方法（漢字の転注）、などというように、漢字の六書と同じような構成法で用いられた。



	古拙文字	前2350年頃	アッシリア文字	補　注
会意				ka「顔、口」とninda「パン」を会してkú「食べる」を表す。
指事				線の交叉によってkúr「敵、他人の、別の」などを指す。
形声				は意符で卵または穀粒、は音符gíg, gig「小麦」を表す。
仮借				temen「土塁」の音価の一部の類似からte「近寄る」にも使用。
転注				原意utu「太陽」からud「日」、babbar「白い」、zalag「清い」その他に転用。

［出典］河野六郎・千野栄一・西田龍雄『言語学大辞典　別巻　世界文字辞典』（三省堂、2001）より

第7節　国字と国訓

1　国訓

漢字は、中国から、あるいは朝鮮を介して日本列島に伝わり、当初は、それらの地での漢字の用法に従って使用していた。たとえば、「橿」を「かし」（木の名）として用いるのは中国で生じた用法による訓読みであり、「椋」を「くら」（倉）として用いるのは朝鮮で生じた用法による訓読みである。

日本に伝来した漢字は、日本で用いられていく中で、次第に、あらゆる点で日本化が起こった。たとえば字音は、声母、韻母、声調のいずれにも日本語化が発生し、類推などにより「輸（ユ）」「絢（ジュン）」など慣用音まで派生した。漢字が日本語を表記するようになると、次第に、漢字には、中国とは異なる意味や用法が現れる。それを国訓と呼ぶ。

たとえ日本の筆記者が新たな文字として創作したつもりでも、中国の著名な文献に先に同一の字体が存在していた場合には、国訓とみなされることがある。そうしたものも従来は、字義が日本で拡大、派生したものと合わせて国訓と一括りにされてきた。

しかし、日本語の漢字を把握するためには、個々の漢字や使用文献の来歴や伝播をとらえつつ、個別に検討を加える必要がある。「杜」（もり）が、中国での「杜甫」「杜絶」などでの使用例を知らずにつくった結果とみなしうるのかどうか、当時の書籍などの伝来や識字の状況から見て、存在を知った上で転用させたという可能性を考えなければならないのである。

■**国訓の例**

椿　つばき（中国では霊木の名）
鮎　あゆ（中国ではナマズ）
鮭　さけ（中国ではフグ）
杜　もり（中国では木の名コリンゴ、ふさぐ）
芝　しば（中国ではキノコなど）
粉　デシメートル（中国ではこな）

「粉」（こな）など中国の字義は、日本でも使われている。

漢字の意味や使い方を派生させたり転用させたりすることによって、字音語にも、

「番」（バン　見張りの意）
「旬」（シュン　一番良い時期。中国では十日間）

といった国訓が生じた。訓読みが多いが、それに限らずこのように広く日本製の字の意味を国訓と言う。また、漢字の構成要素と構成法に再解釈・見立てを加えることなどによって、

「森」（もり）
「弗」（ドル）

などの国訓も生じた。外来語の場合は、当て字としてもとらえられる。

■**国字の構成方法**

会意…峠　込　榊
形声…働　腺　鰊　鋲
象形…匹（ゲレイン　ローマ字の「G」をかたどる）
指事…十（もぎ）（姓、「木」から「人」（枝）を取り除いたもの）
合字…粂　麿
その他…俣（「俟」が変化したもの）　匁（中国での「錢」の崩し字から）　枠（「枠」の略字からとも言う）

国字の例	出現時代
鴨　しぎ	奈良時代
榊　さかき	平安時代
畑　はた	鎌倉時代
峠　とうげ	室町時代
枠　わく	江戸時代
俥　くるま	明治時代

2　国字

●国字の発生

漢字は中国において歴史上常に造られつづけ、周辺国に影響を及ぼした。

そうして漢字の構成法と要素を模倣して日本でつくられた文字を国字と呼ぶ。造り字、和字、倭字などとも呼ぶ。漢字文献における擬製漢字の一つとされ、朝鮮、ベトナムでもそれにならった造字が行われていた。朝鮮では、たとえば「た（水田）」に「畓」という字をつくっていた。中国や朝鮮での造字の影響を受けて、日本でも造字がなされるようになる。なお、国字は、一国における標準的な文字体系や、和字などと同様に仮名（合字を含む）などのことをさすこともあるが、ここでは日本製漢字と、それに準ずる文字のことをさす。漢字に包含されるが、漢字を中国製のものに限って狭くとらえる場合、その対として国字と言う（図2-29）。

受容した漢字を血肉化し大衆化する中で、仮名よりも真名という価値意識を背景につくられ続け、使われた国字は数千種に達すると考えられる。

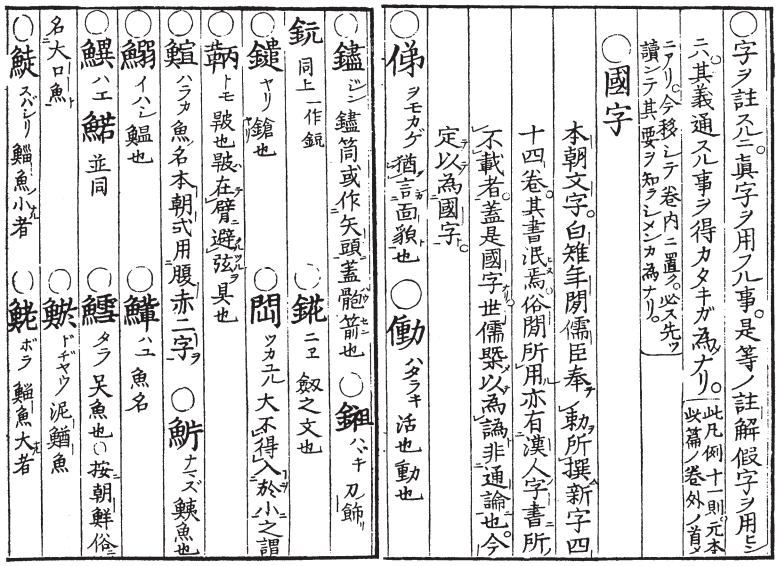

○字ヲ註スニ。眞字ヲ用フル事。是等ノ註解假字ヲ用ヒニハ。其義通スル事ヲ得カタキガ為ナリ。此凡例十一則。元本此篇ノ巻外ノ首ニアリ。今移シテ巻内ニ置ク。必ス先ツ讀ンテ其要ヲ知ラシメンカ為ナリ。
○國字
本朝文字。白雑年閉儒臣奉勅所撰新字四十四巻。其書泯焉俗閉所用亦有漢人字書所不載者。蓋是國字世儒槩以為譌非通論也。今定以為國字。
○俥　ヨモカゲ　猶言面貌也
○働　ハタラキ　活也動也
○鑪　ロ　鑪筒或作矢頭蓋髓箭也
○鍾　ハキ　刀飾
鈗　同上一作鋺
○銃　ニヱ　叡之文也
○鑓　ヤリ　鎗也
○閊　ツカエル　大不得入於小之謂
○鞆　トモ　鞆也鞆在臂避弦具也
○鎧　ハラカ　魚名本朝式用腹赤二字
○鮒　ナマズ　鯰魚也
○鰯　イハシ　鰮也
○鱆　ハエ　魚名
○鰈　ハエ　並同
○鱈　タラ　吳魚也○按朝鮮俗名大口魚
○鰍　ドヂヤウ　泥鰌魚
○鮗　スバシリ　鰯魚小者
○鮭　ボラ　鯔魚大者

図2-29『同文通考』（「異体字研究資料集成」所収）

［出典］河野六郎・千野栄一・西田龍雄『言語学大辞典　別巻　世界文字辞典』（三省堂　2001）より

第2節　平仮名

▶「平仮名」という呼称…「仮名」「仮字（かな）」、「女手」とも。「か（仮）りな（名）」→「かんな」→「かな」となる。平安時代には、「しん（真）の手」、「そう（草）」、「かたかな（片仮名）」、「あしで（葦手）」などの書体があり、これらと区別して「かな（仮名）」と呼ばれた（『宇津保物語』）。

「真名」（＝漢字）を公式の文字と認めるのに対して、「仮名」は私的、臨時的な文字とする呼称。

「平易で一般的な仮名」の意の「平仮名」の呼称は、室町時代の桃源瑞仙『千字文　序』（15世紀後半）に「倭字有三、曰片仮名者焉、曰平仮名者焉、曰伊路半者焉」と見えるのが最も古く、16世紀末以降のキリシタン文献にも「Firagana」（『日葡辞書』、ロドリゲス『日本小文典』等）と見える。

▶平仮名の生成原理…万葉仮名を楷書様に書くことは労力がかかるので、より《楽に速く》書けるようにと、万葉仮名を崩し（＝草仮名）、さらにこれを簡略な形にして、整えていった。つまり、〈草体化〉の原理を軸として、さらに〈簡略化〉を加えることによって、平仮名がつくられたのである。

1　平仮名の成立

▶作者…弘法大師空海がつくったという説は13世紀末から見え（卜部兼方（うらべかねかた）『続日本紀』）、以後広く行われるが、現存の平仮名文献は、その字体もまちまちであって、一通りでないことなどから、一個人の作ではなく、多くの人の手を経て徐々に整備されていった、社会的産物と考えられている。

▶成立時期…現物の平仮名資料は、9世紀末から見え始め、これを遡るものが見えないことから、おおよそこの時期に平仮名が生まれたと見られる。

表3-2　平仮名の字体の変遷

資料名	年代	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に	ぬ	ね
虚空蔵菩薩念誦次第紙背消息	九六六年頃		い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に	ぬ	ね
北山抄紙背仮名消息	一〇〇〇年頃	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に	ぬ	ね
秋萩帖	一〇世紀末	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に	ぬ	ね
元永本古今和歌集　巻第一	一一二〇年	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に	ぬ	ね

［出典］松村明『大辞林　第三版』（三省堂、2006）をもとに作成

所在	ん	を	ゑ	ゐ	ゐ	わ	ろ	れ	る	り	ら	よ	え（ヤ行）	ゆ	や	も	め	む	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の
石山寺		を	ゑ	ゐ	ゐ	わ	ろ	れ	る	り	ら	よ	え	ゆ	や	も	め	む	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の
京都国立博物館		を	ゑ	ゐ	ゐ	わ	ろ	れ	る	り	ら	よ	え	ゆ	や	も	め	む	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の
東京国立博物館		を	ゑ	ゐ	ゐ	わ	ろ	れ	る	り	ら	よ	え	ゆ	や	も	め	む	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の
東京国立博物館	ん	を	ゑ	ゐ	ゐ	わ	ろ	れ	る	り	ら	よ	え	ゆ	や	も	め	む	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の

時代に成立し、中国の「〻」を誤認してできた和字とも、漢字の「二」が崩れて次第に変化したとも説かれ、さらに「同じ」の意を表す「僉」の省文を字源とする説も出されるが、いずれも俄には決めがたい。中国では、先秦時代より漢字列の反復に「〻」「丶」「〻」を用いており、漢字Aの反復に「A〻」のように書き表し、漢字二字以上の文字列ＡＢについては「Ａ〻Ｂ〻」「ＡＢ〻〻」の二形式が存した。

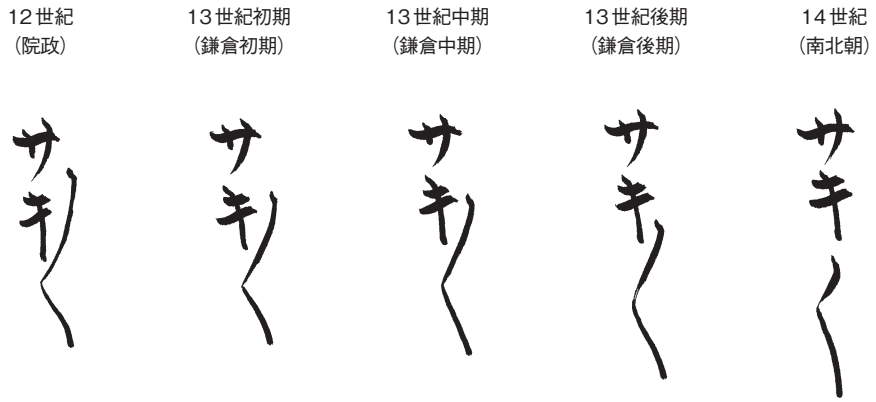
日本語の踊り字は、この漢字の形が仮名へと及んで発達したものである。

平仮名の場合、当初二字以上繰り返す形式に種々のものがあったが、連綿の書法が「〻〻」にも行われて平安時代の10世紀後半には「く」の形が見えるようになる。片仮名では、この形は平仮名よりやや遅れて院政期頃に出現するようである。

特に、片仮名文の場で用いられた「く」の形は、院政期から鎌倉時代にかけてその起筆位置に変化が生ずるようであり、12世紀から14世紀にかけて、その起筆位置が徐々に下方に移動するようになる（図5-11）。これは、書記労力の軽減を要因とすると考えられている。

また、現代では、IT時代を迎えパソコンが普及するにつれ、電子情報として扱う踊り字の用法が今後どのようになってゆくかが問題となろう。ワープロソフトの一太郎やワードでは、「々」字は「どう」と仮名で入力すれば変換することができ、それ以外の踊り字は、「丶」「〻」「〻」「〻」「く」「ぐ」が用いられている。

図5-11 踊り字の起筆位置の変遷（片仮名の場合、イメージ図）



第5節 句読点

一つの文の終わりを示すのが句点で、文の成分が直後の成分を修飾しない時に区切りを示すのが読点である。句点は「。」もしくは「.」、読点は「、」や「,」が用いられる。1954（昭29）年に依命通知された「公用文作成の要領」では、横書きの場合の句読点は、「,」と「。」を用いることになっているが、一般日常文では「、」と「.」の組み合わせで書かれることも少なくない。学校教育の現場では通常は「、」と「。」を用いている。

▶読点の打ち方…個人によってかなり幅があり、統一的な表記法はないが、①文の主題を示す語句のあと、②文の中止するところ、③条件や理由をあげる語句のあと、④接続詞や感動詞のあとなど、おおよその目安となる打ち方はある。

▶句読点の起源と展開…日本の句読点の起源は、漢文訓読に求められる。奈良時代の『李善注文選抜書（りぜんちゅうもんぜんぬきがき）』に文や句の切れ目に「、」を施すのが実際の文献例として最古であり、以後平安時

※2行目「大や」のことばに「さて〳〵今聞ましたが。大変なことでござる。何にいたせ。しんだものゝ首のないといふは」とあり、続いて「イヤ〳〵おやぢどの。きづかいさつしやるな。首はあります」とある。句点も読点も同じ「〇」の符号を右下に打つ方式。

図5-12『東海道中膝栗毛』の句読点